参考資料4

第２回福井県高等学校教育問題協議会　議事録

□日　時　　平成２０年　１月２３日（水）　　１４：００～１６：００
□会　場　　国際交流会館３階　特別会議室
□出席者　　委　　員：清川委員、四戸委員、瀬尾委員、津田委員、橋詰委員、馬場委員、福岡委員、福田委員、藤田委員、三上委員、山崎委員、吉岡委員、吉川委員、吉田委員、渡辺委員（１５名、五十音順）
　　オブザーバー：県高等学校教職員組合　鈴木執行委員長、県教職員組合　高嶋副執行委員長、県中学校長会　堀田会長、県高等学校長協会定時制・通信部制部　矢崎部会長、県高等学校長会　吉田会長（５名、五十音順）
□事務局　　広部教育長、伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹（学校教育）、山内教育政策課長、中島高校教育課長

○開会

教育政策課長　ただ今から、第２回目の「福井県高等学校教育問題協議会」を開催いたします。皆様方には、お忙しい中、会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。なお、本日、委員の御出席は１５名ということでございまして、全委員１８名の過半数に達しております。従いまして、会議が成立しておりますことを御報告申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、広部教育長から一言御挨拶を申し上げます。

○あいさつ

広部教育長　本日は、御多忙のところ、「福井県高等学校教育問題協議会」に御出席を賜りましてありがとうございます。厚くお礼を申し上げます。

去る１２月の１１日に第１回目の会議を開催いたしまして、今後の県立高等学校の目指すべき方向性について諮問させていただいたところでございます。今後、「地域の実情を踏まえた望ましい学校規模と配置」について、２つ目に「社会のニーズに対応した職業系学科の在り方」、さらに３つ目として「就学、就労形態に応じた定時制・通信制課程の在り方」、この３点につきまして議論していただくこととしております。

前回は、事務局の方から本県の高校教育の現況を御説明し、委員の皆様から自由に御意見をいただいたところでございます。今回からは、課題ごとに、集中的に議論を深めていただきたいと考えておりまして、まずは「社会のニーズに対応した職業系学科の在り方」から議論をお願いしたいと思います。

前回、委員各位からも御指摘がございましたが、職業系学科については、学校での学習内容と社会が求める知識や技術との間に隔たりがあることや、卒業後の進路とのミスマッチが生じていることなどの様々な課題がございます。また、進学希望者の増加など、生徒のニーズも非常に多様化をしておりまして、県としても、こうした新しい時代にふさわしい職業系学科の教育体制を構築していく必要があると考えております。

皆様方におかれましては、生徒たちにとって最良の教育環境を整備するという視点から、今後の職業系学科の望ましい在り方について、幅広い御意見をいただくようお願いを申し上げたいと思います。

今年の１月８日付けの一部の新聞において、お読みの方もあろうかと思いますが、「政府自民党は職業教育を強化・充実するため、中学卒業を資格とする５年

制の新たな職業教育機関を創設する検討に入った」と。要するに、工業高校や商業高校の再編ということで、５年制の職業高校を政府自民党が検討ということで記事が出ておりまして、私どもこの点につきましては、文科省に直接問合せいたしました。そうしたところ、「文科省としてはこういった新たな職業教育機関を創設する検討に着手したということはない」という返事をいただきました。そういったことで、自民党の一部議員においてこういった検討に入ったということでございました。ただ、文科省におきましても、「雇用のミスマッチやニート対策の観点からも職業教育の充実・強化は重要な問題であると認識しており、今後とも自民党における議論の動向を注視してまいりたい。」と、こういう返事がございまして、肯定も否定もしていないという感じがいたしますが、国においてもこういった職業教育の転換期にあるということで非常に重要視しているということは読み取れると思います。この点につきまして、若干説明させていただきました。それではお願いいたします。

○委員の紹介

教育政策課長　それでは、本日、はじめてご出席いただいた委員の方がいらっしゃいますので、御紹介させていただきます。

・福井県ＰＴＡ連合会会長の福岡委員でございます。

・福井県連合婦人会会長の吉田委員でございます。

それでは、議事に移らさせていただきます。なお、委員の皆様には、お手数ですが、ご発言いただく際には、お席のマイクのスイッチを入れていただきますようお願い申し上げます。以降の議事進行は、福田会長にお願いすることといたします。福田会長、よろしくお願いいたします。

○議　事

福田会長　それでは皆様、お忙しいところ、今日お集まりいただきましてありがとうございます。早速、議事に入らさせていただきたいと思います。

今、教育長のほうから説明がございましたように、昨年１２月１１日に、県教育委員会から本会議に対して、「今後の県立高等学校の目指すべき方向性について」諮問を受けたところでございます。諮問の内容についても説明がございましたが、検討事項としまして「地域の実情を踏まえた望ましい高校の規模および配置」、「社会のニーズに対応した職業系学科の在り方」が２番目、３番目に「就学、就労形態等に応じた定時制・通信制課程の在り方」の３点を中心に検討を進めて欲しいという依頼がございました。

今後の議事の進め方ですが、まずはじめに、「職業系学科の在り方」から集中的に議論いただいて、次に「望ましい高校の規模・配置」、「定時制・通信制課程の在り方」の順で御議論をいただきたいと存じます。

本日の主たる議題になります「社会のニーズに対応した職業系学科の在り方」。これはなかなか難しい問題であります。「社会のニーズとは何か」ということですが、これは、大きく３つに分けて考えられるのではないかと私は思います。ひとつには、まず「生徒数」。生徒数の減少問題、これも社会のニーズの変化と捉えることができようかと思います。２番目には、「生徒のニーズの変化」。これも、後ほどちょっと述べますが、職業高校でも進学を希望する生徒が増えてきているという事実。３番目には、「社会情勢がかなり変化いたしまして、高校の課程、学科等に求める内容が変化してきている」というふうに、大きく３点に分けて捉えられるのではないかというふうに考えられます。

まず、最初の人数の件については、前回、１２月１１日にも議論を行ったところでございますけども、お手元の参考資料２の１１ページに一覧表が載せてござ

います。これは、地区ごとの生徒数の変化、平成１９年から３３年までの変化が示してございます。例えば、福井・坂井ですと平成１９年度では４，１７９人の生徒数がいたのですが、２４年度には０．３％減の４，１６８人、平成２９年には４．１％減の４，０１６人、平成３３年には１２．８％減の３，６５４人となるというふうに読めると思います。これは、向こう５年間は、奥越を除いてはさほど大きな変化は見られないんですが、１０年後、１４年後には大きな減少が見られるということを読み取ることができると思います。これに付随いたしまして、標準法と呼ばれる法律があるらしいですが、「公立高等学校の適正配置及び教職員等の標準等に関する法律」と呼ばれる法律らしいですが、これに従いまして、当然、生徒数の減少に伴いまして、教員の数も減ってきております。その結果として、全国３３都道府県では、望ましい学校の規模として、一学級の生徒数は大体４０人、一学年の学級数は４から８学級というふうに意見が出ているそうですが、私たちの福井では、大体３０人から４０人という小規模編制が達成されているわけでございます。ある意味では望ましい状況が続いていると。ところが、平成１１年の本協議会では、本県の一学校当たりの適正な生徒数は５００人から１，０００人と答申がされたそうですが、これも参考資料２の１４ページを見ていただくと、トータルが５００人を切っている学校が１０校ございます。このように私たちの県では、特に少子化の傾向が一般的に強いように見受けられます。学校の小規模化にはいろんな意味で、いい点も確かにございますが、全体的には、教育効果を高めるためには、一定の規模を確保する必要があると考えられるわけでございまして、あまりに生徒数が減少しすぎますと、多様な科目の開講ができなくなってしまう、それから生徒の学習の選択権が狭まってしまう、というような弊害が出てくることが予想されます。それから、教員数が、標準法に基づいて行われれば、十分確保されないわけですから、生徒指導上、例えば課外活動等に、これは当然問題を来たしてまいります。３番目としましては、学校全体のですね、例えば、ある行事を行うにしても活力が全体的に低下いたしまして、部活動等学校行事に影響を来たすと考えられます。それから数の減少のほかに質の変化の中に多様化が生じてきていると先ほども申しましたが、前回清川副会長の方からも指摘がございましたように、高校での学習内容と、実際に就労後に求められているいろんな知識・技術、社会環境の変化の間に、ギャップが存在しているという事実。それから、各職業系学科の生徒が当該学科に関連した方面へ就職する率が、しばしば、ある職業校の区分に関しましては、倍近くまでに変化しておりまして、就職が減って、進学率が増えていると。これは資料１の１５ページにあるということで、また、課長の方から説明があると思います。

このように、いろんな意味で「社会的なニーズ」、一言で「ニーズ」と言っても、今、分析したようないろんなニーズの変化が指摘されて、それに対する課題が存在しているわけであります。職業系学科は、１学科１学級が主流でありまして、就職・進学等の希望者が同時に混在している場合はですね、教育のいろんな意味での困難性ということが、これは想像に難くないわけでございます。これは、生徒数の減少が進む中で、地域によりましては、毎年定員を下回る学科を持つ学校があったり、あるいは、今後小規模化が更に進みますと、学科自体の経営・運営が成り立たなくなる危険性も出てまいるとというふうに思われるところでございます。そのようなことが、前回１２月１１日にも議論されました。その大略の復習と申しますか、こういうことをある程度含めまして、今サマライズさせていただきました。そこで、現状とこれからの課題について、皆様方から御理解をいただきたいと思いますが、まず、事務局の方から「本県産業の構造と県立高校職業系学科の現状」について、参考資料１に基づいて、ご説明願いたいと思います。よろしくお願いします。

＜論点説明＞

高校教育課長　よろしくお願いします。まず、参考資料１に基づきまして、簡単に、本県産業の構造と県立高校職業系学科の現状について、説明させていただきます。

まず、最初に「本県産業の構造」でございます。簡単に言いますと、福井県の就業者の割合が高い。県内の１５歳から６４歳のいわゆる生産年齢人口は６２．５ですので、就業率が６０．６ということは、基本的にほとんど全員の方が働いておられる、全国でもおそらく１、２の高さを誇っている県であります。内容は、御承知のように、全国的に見ても、製造業とか建設業の比重が高い。ところが、２ページを見ていただきますと、全国よりも反対に、近年は全国より高い割合で、製造業とか建設業の就業者割合が下がってきております。反対に、医療・福祉とかサービス業が増えてきており、少し福井県の産業構造は、全国とは少し違う動きをしているということを示したのが、２ページ３ページであります。

４ページを御覧ください。福井県の求人状況であります。ピークの昭和６３年では３，６００人の高卒者が就職しておりました。それが昨年は１，６７０人の就職というふうな形で、まず、絶対的な生徒数は、当然ですが減ってきております。その中で、ここ４年の求人数をご覧いただきますと、やはり、圧倒的に製造業が、景気の回復も含めて増えてきているという状況が読み取れます。また、医療・福祉等も増えてきております。次のページには、県内総生産は、大体３兆円の規模であるとかということを簡単に参考のために挙げさせていただきました。

６ページ以降には、各学科の現状を挙げさせていただきました。まず最初に農業系ですが、かつては、農業・林業・畜産・いわゆる農業土木・農産加工、それと生活科というふうな科がありました。それが、農業・林業・畜産等が生物生産科など、少しずつ名前が違っておりますが、こうした再編がなされて現状に至っております。環境工学、環境システムというあたりに、かつての土木・建設プラス環境が入っておりますが、学習内容が数学・理科等のレベルもあり、また、出口の問題もあるのかもしれませんが、若干、そこあたりが弱いためか、募集が切れることがございます。その中で、大体３０８人が昨年卒業しまして、１７６人が就職、そのうちの７９人が関連のところ、農業関連へ勤めている。これは学校からの報告ですので、関連の捉え方はやや広くなっておりますが、約半数が関連のところに勤めておるということであります。そういう中で、平成９年の４年制大学への進学率は３．３％でしたが、昨年は８．６％が進学しておりますし、反対に就職は平成９年が６７％、これが５７．１％というふうに約１０ポイント下がってきております。

８ページ、９ページ、これは工業です。かつても今も圧倒的に多いのが、機械関係です。そして電気関係、建設関係と、これが全国で２，０００から１，０００というふうに、全国の工業系でも人気のある学科です。その次の情報になりますと、だいたい５００が全国でありますので、福井県もだいたいそういう同じような形。その次に化学がきます。名前はいろいろありますが、大きく言うと、そういうふうな形で再編がなされて、今に至っております。この工業系に関しては、１０年前と就職率はほとんど変わりません。４年制には少し増えておりますが、就職は７１から６０という、割と高くなっております。

次に１０ページを見ていただきますと、商業系ですが、いわゆる簿記・会計とか、商業マーケティング、またこの科では「情報処理」という、かつての計算機とかソロバンに替わるものとしての学科が大きな比重を占めております。そういう中で、この学科は非常に進学志向が高くなっております。昨年で７６８人が卒業しましたが、就職は２８２人ということですので、進学が非常に高くなっております。就職率は３７％です。それ以外の生徒さんは進学ですし、４年制大学にも約１／４が行っております。普通科に近い性格の学科を持っております。

あと、１２ページ、１３ページに水産、家庭学科、厚生、いわゆる福祉ですが、そういう学科が福井県にはありますが、だいたい同じ傾向、水産は農業系の傾向、家庭科は商業学校の傾向、福祉はちょっと違いますが、そういう傾向であります。

先ほど会長から御指摘がありましたことが、１５ページにあります。いわゆる平成４年から１４年、１９年という中で、各大学科の卒業生が、どのような形で大学、専門学校、就職へと進路が変化してきたかが、１５ページの上段の表であります。下段のほうは、その大学科の卒業生が「どういうところに就職したか」という数字であります。

次のページでは、福井県における職業系学科がどういうふうな形で置かれているかをマップに落とさせていただきました。いわゆる単独で置かれている福井商業や福井農林というような高校と、金津高校に商業科が置かれてあるというような形を図示させていただきました。以上が、簡単ですが「本県の産業構造と現状」であります。

それでは、もう少しだけ時間をいただきまして、今日の論点をご説明いたします。「社会のニーズに対応した職業系学科の在り方について」という冊子が一番最後に入っているかと思います。

概況を踏まえた中で、論点を１から４という形で上げさせていただいております。まず、先ほども会長からお話がありましたが、いわゆる専門高校・学科に、就職希望者と進学希望者と両方いるわけですけれども、その現状にどう対応すべきか。進路のニーズが多様化しておるということが一点です。

まず、１ページには農業系を上げておりますが、全体でいいますと、平成１９年、昨年３月ではこの専門学科すべてをトータルしますと、就職が４９．６％、進学が４８．５％であります。２ページには工業系学科、商業系学科という形で、それぞれの学科における進学率、就職率、さらに、その中で就職に関しましては、どういうところに就職しておるかという形で、各大学科ごとに、記載させていただいております。先ほど申しましたように、基本的には大学への進学が増えておりまして、特にそれは商業系等において顕著に見られる傾向があります。

４ページを見ていただきますと、この前も御指摘がありました、「職業系高校の生徒の意識はどうか。」ということで、現在の３年生にアンケートを取らせていただいたところ、今の学科・学校への志望は第一志望であったという回答率は８６．７％で、非常に高い数字が出ております。その中でも、商業、厚生、家庭、工業、農業、水産というふうな順になっており、少し差ははありますが、基本的には高い。反対に第一志望でなかったという生徒も、農業で２３％という形でおりますが、全体では１３％という形であります。

これは平成９年のときの高問協でも取り上げられておりまして、だいたい似たような数字、福井県の生徒は、３年生になりますと、割と満足して卒業しております。

次に５ページを見ていただきますと、学科の設置形態といたしまして、単独の学科、武生工業高校とか福井農林高校という形の専門学科のみの高校と、併置の高校。さきほど言いました金津高校とか敦賀高校、美方高校のような高校があります。

単独学科のメリットは、そこに記載させていただきましたように、学校の目標が、ある意味でベクトルが一つになりやすいし、当然のことですが、専門性を高めることができる。ただ、デメリットは、そういうことを希望しなくなった段階ではつらいとか、もともと意識がなかった場合には居づらいとかといった面はあります。

反対に、併置の学校においては、普通高校との併置の場合には、進学指導がスムーズというところはあると思いますし、商業科と家庭科というのは大きな施設

が必要でないというところがあります。

６ページをご覧いただきたいと思います。それ以外に、若狭東、大野東というように、複数の大学科を持っている高校もあります。これは、農業系だけとか、商業だけとか単独ではなかなか存続が難しい、規模が持てないときにこういうことをやっております。ちなみに、勝山南が３クラス、大野東が４クラス、若狭東は６クラスです。福井県は大きく分けると、この３つの類型があるということであります。

７ページには、「職業系学科の方向性」ということで少し書かせていただいており、今のような課題を踏まえてどういう方向性があるか、ということで、進路希望に応じた、多様化に応じた教育体制を整備する必要があると。それと、社会の要求が高度化する中では、それに対応する専門教育の充実というようなことがある。もう一つは、「総合的な産業というような視点での学びの場」というような発想もあるかなというふうに考えられます。最後には、進学には進学に合わせた方向性もあるかなということを書かせていただきました。

８ページには、他県の総合技術高校等の事例を挙げています。神奈川県の場合には、どちらかというと総合学科のような形でありますし、鳥取県の境港総合高校の場合ですと、いわゆる大学科を集めたという形に読み取れるかと思います。

１０ページをおめくりください。論点２、就職を希望する生徒にはどのような教育をすべきか。特に、専門学科の大きな役割の一つに、地域社会の産業を支えるということがあります。

福井県の地域労使就職支援機構のアンケートの結果を資料に載せさせていただきました。福井県の場合には、約半数が新卒者を正規社員として計画的に採用するという場合が多いということであります。業種別には、建設業、卸売業等が、そのような形態を特に高い比率で持っておるというふうに言えますし、非正規社員等においては、サービス業等が多いというふうに読み取れるのが１１ページの表であります。

１２ページを御覧ください。先ほどの支援機構のアンケートによりますと、福井県の企業が採用に際して重視する要件としては、何よりも意欲、向上心のある人を求めている、その次が、約半分になりますが、専門知識・技能、プロ意識とか、協調性とか、コミュニケーション能力という形になっております。以上が大体の傾向です。

１４ページを御覧ください。職業系学科の教育体制としては、職業観、勤労観の定着、産業動向に適合した産業教育の充実とか、地域や産業界との連携を深めるというようなことが必要であるという方向性が考えられると思います。

１５ページをお願いします。論点３「進学する生徒に対して、希望する生徒に対してどのような教育が必要か」ということであります。これは非常に全体的な問題です。福井県でもだいたい大学・短大で５６％、就職はだいたい２０％ちょっとですので、専門学校を入れますと、全体では８０％近い生徒が進学・就職で分かれます。先ほど申しましたように、専門学科も約半数が進学を希望しておるということですが、１５ページには、日本全体の動向を載せてあります。「大学にはどういう学科が増えているか」ということでを記載させてもらいました。いわゆる保健、看護学科とか、臨床検査技師とか、医学・保健関係が学部では今急速に増えてきております。

１６ページをめくっていただきますと、学生数では、やはり医療系・保健系が非常に増えてきております。反対に、人文・社会、工学部関係は学生数が減ってきているという状況であります。その中で、職業系学科からの大学等への進学率は、全国では農業で１４．１％、「大学等」というのは専門学校は入っておりません。大学・短大が主です。福井県の特色を見ますと、やはり、工業とか農業と

かはだいたい全国並みですが、特に商業系における、商業学科における大学進学率が非常に高いということがうかがえます。

１８ページを御覧ください。福井県における普通科目と専門科目の割合は、だいたい６対４ということで、各学科とも普通科目、英語・数学・理科・社会等の普通科目をだいたい６勉強し、専門科目はだいたい４勉強しておると。１０時間のうち、６対４に分かれるというわけです。商業と家庭は、やはり、普通科目が多いです。そういう中で、職業科の進学の体制をどう作るかということを御議論いただきたいと思います。

最後になりましたが、２２ページを御覧ください。「学科は従来のままでいいのか」、「新しい学科の導入は必要か」ということで御議論いただけるとありがたいかと思います。従来の学科の枠に囚われないということで、どういう例があるかを少し出させていただきました。京都の伏見工業高校のような高校では、いわゆるデュアル・システム、デュアルですから二つ、学校と工場、座学と実習というふうな二元的にやると、それぞれを単位に認めるという方向、富山県のように、薬の関係の学科を置くというような形、２４ページ以降には、大阪の芸能文化、宮城県の体育学科、群馬県の尾瀬のように環境というような学科を置いているところがあります。

以上で論点１から４までの説明を含めまして、終わらせていただきます。

＜意見交換、質疑応答＞

福田会長　かなり豊富な内容で、難しい問題を含んでいます。論点に従って委員の意見を頂戴したく思います。

論点１から始めます。就職希望者と進学希望者が混在する現状にどのように対処すべきか。福井県はどのように対処していくとよいか。これについて、考えがありましたら、自由に御発言ください。この機会に、知恵を出していただいて、自由な意見を闊達に出していただきたいと考えます。

吉岡委員　課長の説明を聞かせていただいて、きめ細かく、地域にいろんな職業学科が配分されていることを改めて感じましたが、実際に、それぞれの職業系高校に入った生徒が１年から３年に進級するとき、どのような意識の変化があるのか。就職するべきか、大学に進学するべきかの意識の変化ついての調査等があれば聞かせていただきたい。１年時の進路指導は重要と考えます。具体的な事例があれば、職業系高校の１年生のカリキュラムと指導について教えていただきたいです。

福田会長　事務局、データはありますか。

高校教育課長　概して、入学時は就職を考えている生徒が多いのですが、入学後、徐々に進学が増える傾向があります。

福田会長　生徒が、ある職業系学科を選んだときに、その学科の使命だとか、有意義で興味の持てる領域がこういうふうに広がっているのだとか、教員の方からそのような立場で指導していることがあるかどうか、そうしたデータはありますか。

藤田委員　私は高等学校に長年勤めていましたが、高校に入学に当たり、生徒は中学校の段階で、大学等へ進学するならば普通科、就職するならば商業科と指導されてきています。ところが、高校に入学して、いざ就職先について考えていくときに、金融機関に就職したい生徒の場合、現在、例えば地元の銀行では、高卒者ではなく、大卒者を採用している現状があります。やりたい、就きたい職業への意識が

芽生えてきたときに、今のままで卒業しても、行きたいところへいけないと。
親の世代は、若狭高校の商業科を卒業したならば、都市銀行へ就職ができた時代であります。証券会社、都市銀行にも就職ができ、出世できた時代であります。親はその時代を知っています。しかし現在は、高校を卒業しただけではそういうところにはいけない、就職状況がよくないことを知り、進学しなくてはいけないという気持ちが起こってくるのです。特に商業系の学科においては、そのような部分があります。
大きな会社の営業担当もだいたいの採用基準が大卒以上となっています。その部分で高等学校の専門教育を考えるとき、社会がどのような生徒を求めているか、高卒の就職先は狭まっていることを考えながら、高等学校の専門学科の教育を考えていかなくてはいけないと思います。

福田会長　貴重な意見ありがとうございます。進路状況は多方面にわたっておりますが、実際に就職していることも間違いありません。また、場合によっては、高校の職業教育を受けただけでは入れない部門も存在しています。事務局サイドで、データはありますか。

高校教育課長　職業系学科１年時の進路希望調査と３年時の実際の進路状況を対比する資料は、今のところ持っていません。

福田会長　質問の充分な回答になっていないかも知れませんが、意見をいただいたことが要素になっている分野があります。

吉岡委員　資料のグラフで、就職する生徒の就職先で建設業と製造業が一緒になって表示されています。建設業と製造業では内容的にかなり違っています。製造業は、例えば水産加工会社に水産高校の生徒が行かれたり、農業系高校の生徒が製薬系に行かれたり、バイオ関係、金属、機械など非常に幅広いです。建設と製造が同じ分野にするデータ的にはつらいのではないでしょうか。
細かく見ることによって、より学校のカリキュラム編成がきめ細やかにできるのではないかと考えます。

福田会長　建設業と製造業をひとつにまとめているのは不明確であると。製造業でも農業や水産業等に直結した製造業があり得るのではないかとの意見だと思いますが、それに伴って、カリキュラムの方で、習熟に向けてアジャストすることが可能なのでしょうか。

高校教育課長　建設業と製造業は分けることはできますが、機械、金属、水産加工は個々になりますので、県としては卒業者約１，２００人の業種は把握していますが、個々の詳しい分類まではできていません。学校基本調査に基づく形でしております。

福田会長　統計を取るときに、各高校に細かい分類までして調査をかけても回答が得にくい状況があり、このことがデータの粗さに出てきています。

吉岡委員　個々で議論するには、細かなデータが必要ではないでしょうか。建設業と製造業ではまったくジャンルが異なります。

福田会長　重要な指摘だと思います。

瀬尾委員　　職業系と普通科系とはどう違うのかというと、普通科系に行っている生徒は、自分の進路を先延ばししているんですね。文系、理系の進学または就職を１年の猶予で考えます。ところが、職業系の生徒は、中学３年になって自分の進路を決めなくてはいけません。それは成績に関わっていて、自分が本当に希望した学科に入れたかどうかは疑問です。資料の意識調査の結果は、先生との面談での最終的希望だと思います。

職業系の生徒にも、１年間じっくりと猶予を与え、その間、職業観や学力向上をしてもらって、２年から専門的な学習や進学に向けての体制をとってあげた方がいいのではないでしょうか。

福田会長　　高校の３年の中でやるということでしょうか。最初の１年は様子見だということでしょうか。

瀬尾委員　　私は教育委員をさせてもらい、いろんな高校を見せてもらいましたが、入学してくる生徒たちは、ゆとり教育の中で、中卒のレベルまで終えていないので、高校でレベルを上げなくてはいけない状況があります。その面を含めて充分学力をつけて、加えて職業観を自分なりに充分考える１年間の余裕を作ってあげて欲しいです。

福田会長　　その後でも、学年が進むに連れて、進学したいと思ったときはどのように対応したらよろしいでしょうか。

瀬尾委員　　時期的なものもありますし、入学して途中からということでもいいですけれど、十分対応できるのではないでしょうか。

福田会長　　どういうふうに対応するのでしょうか。同じクラスの中に就職したい人と進学したい人が混ざっているのですが。

瀬尾委員　　現在でも、就職組と進学組が一緒に混ざっています。進学組に対しては、先生方は放課後にサポート的に学習を補習して、進学に向けてがんばっていただいている。そういった対応はある程度できると思います。

橋詰委員　　資料の意識調査・進学調査等は、高校生を対象にしたデータですね。前段の中学校での指導はどうしているのでしょうか。実態が詳細にはわかりませんが、職業系の高校を選ぶとき、農業、商業、工業高校へいくことの選択は中学生には無理だと思います。自分の人生観の中で、私は将来エンジニアになりたい、農業をやるのだとの決め方のそのものが中学生の実態にそぐわない。

もう少し包括的に見てあげないと、人生設計ができていないのに、商業や工業の勉強をやらされている状況に追いやられているのではないか。各県のモデルケースが示されていますが、入学に当たって、もう少し自分の人生設計を幅広く選択できるような方法を取ってあげないと。最初から「農業をしなさい」となると、農業系の就職に進まなくなり、学んだ系統に進まなくなります。中学校の様子を把握せずに職業系の高校を論ずるのは難しいのでないでしょうか。

福田会長　　確かにおっしゃるとおりの部分もあると思います。しかし、６・３・３制というものが決まっており、いつかは節々で決断せざる得ない時期はあります。今、お話しされたことを可能にする方法があるかどうかということですが、例えば、中学校の段階でもうちょっとゆとりがあって、将来、進学・就職を選ぶようなシ

ステムが考えられれば、それは望ましいです。ところが、現実的状況として、アイデアがあればいいですけれど、具体的に答える方法が見つかっていないのが現実です。ドイツでは、ギムナジウムに入るのは学校４年生で決まってしまいます。大学に入るのか、マイスターになるかは小学校４年生で決まってしまいます。その後は、それに乗っていかなくてはいけません。日本より早い時期に一生の方向を決めている国もあります。それがいいとか悪いではなく、今おっしゃったことを実現しようとすると具体的に何をどうすべきなのかとの提言がなされる必要があるだろうと思います。

橋詰委員　基本的には、単独の職業系高校、農業高校あるいは水産高校、商業高校は内容を見直す必要があると思います。職業系をもう少し総合的に見ていくことがあってしかるべきと思います。新しい形のシステムの職業系高校の在り方を検討されるといいのではないでしょうか。

福田会長　進学希望者と就職希望者が同時に存在している状況でもちゃんとした教育ができるし、できる教育形態を考えるべきであろうとの意見でしょうか。具体的に何かいいアイデアはないでしょうか。

橋詰委員　各県の状況を見ますと、総合技術高校などの形態の高校があり、そういう形で吸収していってはいかがでしょうか。

福田会長　全部に総合学科を置くことでしょうか。

橋詰委員　地域性を配慮して置けばいいのではないでしょうか。

福田会長　総合学科の現状についてはいかがでしょう。前回も質問しましたが、丹南高校総合学校の現状について、総合学科の設置が論点１の問題解決に役立つか否かという質問になるかと思います。

橋詰委員　中学生が、これまでの人生観の中で、職業選別ができるのか疑問です。

加藤企画幹　中学校における進路指導ですが、学年を見渡し、中学校１年から中学校３年生までの３年間を見通した進路指導計画を立てています。そして、いろんな高校を調べるということで、例えば、グループになって、それぞれの高校にはこのような特徴がある、進路はこうなっているとか発表し合い、また、質問したことにグループが答える学習をしています。

また、高校でどのようなことをやっているか見せていただく体験学習であるとか、高校からご説明に来ていただき、保護者と一緒に聞く中で、子どもたちが将来目指していることは漠然としているかもしれませんが、それぞれの高校の特色を子どもたちなりに把握する進路指導を通し、実際には自分の希望どおりにはなかなかなりませんが、勉強面をしっかり努力してもらっています。

中学校では、本人の気持ちを非常に大事にし、また親の気持ちもお聞きしながら、いろんな情報を提供しています。提供する中で、保護者の方、本人に進路を選択していただく方法をとっています。

福田会長　確かに、それは限界のあることでしょうけれども、現状では、中学の先生方は進路指導に関しては非常に神経を使っておられるのではないかと推察されますし、できる限りのことはおやりになっておられると思うので、私は全く自分の意

に反して、入学先を選ぶという可能性は低いのではないかと思います。ある程度の将来に対する見通し、年齢的に、まだ未熟であることは間違いない事実だと思いますが、そういう中でも、ある程度の決心をもって、選んでいる方のほうがおそらくは多いのではないかと推測されます。これは、私の勝手な私見ですが。先ほどの総合学科の件についてはどのような様子でしょうか。

高校教育課長　この前の会議で質問を受け、丹南高校に対しアンケート等をとった中では、基本的に推薦入試で半分とるのですが、その生徒さんは非常に目的意識があります。ただ、今、中３で進路を決めるのは早いのではないかと話がありましたが、高１でも早い。実は、「産業社会と人間」という講座がありまして、そこで勉強して、高校１年間でいろいろ考えて選ぶというシステムになっているのですが、実はそこでも選べない。ずっと高３まで、進路が考えられないという状況もあるので、学科の在り方も少し考えたいという報告が来ており、生徒の半分はモラトリアムがさらに伸びるという現状があります。

福田会長　余談ですが、この間のテレビ放送で丹南高校の卒業作品展のようなものをやっていましたね。こういうことが、いったい総合学科とどう関係するのか、私も疑問を持ちながら見ておったのです。やはり、総合学科といいましても、多分就職希望者と進学希望者の２つが同時に混在しているものを根本的に解決する力になるかといわれると、今のままではなかなか難しい、おそらくまだ工夫が必要になるのではないかという気がします。

それともうひとつ指摘がありました大事な点は、高校の先生に、かなりの負担がかかっているという事実ですね。これは、大学にもいえることでして、大学に入学してきても、例えばすぐに工学部の専門を教えられない、医学部でも同じように、医学に必要な生化学だとか生物の知識が全くなく、補講が必要であると。大学ですらこういう状況になっています。まして、就職と進学が混在している、しかも、数少ない人数の中で混在している場合には、先生の悩みは大変だろうと思います。要するに、自分の時間を割いて、まさにボランティア的に、時間外の講義をかなりおやりになって、進学に対応してられるのではないかと推察されるわけです。そういうことの観点から、何か解決の方法はないでしょうか。

吉川委員　グラフを見ますと、専修等への進学がかなりあります。就職の場合にも関連のないところへ行っていますが、専修等も、農業科をでて、農業の専修ではなく、他の種類の専修へ行くというのも結構ありますね。大学・短大にも若干あるのですが、とくに専修系はこういうことがあるということを頭において見ると、橋詰委員の御意見も理解しやすいと思います。

福田会長　進学と就職を対比させるだけでなく、専修と非専修という対立の構造も中に含んでいるとのご意見ですね。

吉川委員　そうですね。結局、専修というのは、極端にいいますと、就職をしたいけれども学校で学んだこととぴったりこないと。それで、他で磨き直して就職活動をしようという流れも、全部ではありませんが、若干あるということも含んでおかないといけないと思います。

福田会長　質問ですが、その率はどのくらいですか。
専修の中の関連と非関連についてのデータはとってないですか。

ちょっと難しいデータかと思いますが。ぴったりとしたデータは見あたらないようですが、どうでしょう。いずれにしても、論点に関連したものとしてそういう視点も頭の中において議論すべきであるということだと思うのですが、他にいかがでしょう。今までの議論も含めてどうでしょうか。

福岡委員　自分がわが子にどのように進学とか就職とかの話をしてきたかといいますと、まず１点目は、仕事に対する自分の幅を広げなさい、就職時においての選択の幅を広げなさいということ。あれもしたい、これもしてみたいという夢があるのだったら、一生懸命勉強して大学へ行きなさいと。大学へ通っている間に、自分の方向性を自分で決めていきなさいと教えてきました。それで子どもは、親が大学まで行かせてくれるのだったら大学へ進学するということで、中学生の時点で、大学進学を目指して普通科へ一般受験で入りました。

もうひとつ、一企業人、会社を経営する立場として申し上げると、専門校卒業の方は個人差がありますが、高卒で採用する場合と、それと同じような学科の大学を卒業した方を採用場合とでは、年も給料も違いますが、大卒の方は伸びしろがありますね。成長の度合い、会社に入ってからその人の働ける度合い、伸びしろがものすごくあって、ゆくゆくは会社の中枢として、即戦力としてという場合が多いと思います。

そこでひとつの提案ですが、今の大学はどういうシステムになっているかわかりませんが、大概、１学年１回生として入ると、どの学部も専門的なことよりも、専門に入る前の基礎学力的なところをもう一度確かめ直して２回生、３回生と、カリキュラムの差はあると思うのですが、そのような形で学部学科の専門性を磨いていく。高校でも、そのシステムを使ってみたらどうかというのが僕の考えです。

一般の入試として、総合学部がある高校としてそこに入って、１年間はみなさん同じ基礎学力の向上をめざして勉強して、その間に、進学をするのか、就職するのだったらどういう業種に向かっていくのか、といういくつかの学部を用意して、生徒に選ばせる。例えば、選んだ学科で１年生の時に就職したいということを決めても、２年生のときにやっぱり大学へ行きたいということであれば、２年生の途中からでも普通科の進学コースに編入できるようなシステムを作って、学校の数を減らして、学科を増やすというようなスタイルは考えられないものか。実際やるにあたっては、今まで何十年も培われてきた学校の校風ですとか、いろんな先輩・OBの方の思いとか、いろんなものがあるかもしれませんけれども、そういう形で人材を育てていくということを一度提案なされてはいかがかと思います。

福田会長　ありがとうございました。非常に独創的な御意見だと思います。総合学科ではなくて、総合学校、総合高校といいますか、そこで１年間はプレ教育のようなものをやって、その後、どのコースでも進めると。普通科にも進めるし、例えば職業の選択もできるというようにしておいて、さらに、進学を希望する場合は、どのような形態にするか別として、普通科に編入できるような形式をとる、ある意味では、高校連携みたいなものになるかもしれません。普通科を持っている高校との連携をとっていく。今、大学あるいは大学院同士が連携をとることに関して、国はかなりの支援をしていますが、高校レベルにおける連携というアイデアが、今おっしゃったことにあたるかと思います。これは、ひとつの提案としておもしろい提案じゃないかと思います。他にないでしょうか。

山﨑委員　　論点１の就職希望者と進学希望者の混在という状況への改善策についてですが、議論の流れで、総合学科をイメージしたコースが提案されてきていると思います。先ほど連携高校ということもありましたが、総合学科等がかなり強く意識されていたと思います。総合学科は、現在、全国的に毎年２０校ずつくらい増えていますけれども、数としては単位制高校等に比べて少ないわけです。その理由は、先ほど教育委員会の方から御指摘がありましたように、「モラトリアムの先延ばし」という現象がどうしても起こりがちになります。まあ半分くらいの生徒でありますが。総合学科の方向を考えるならば、必ず、できるだけモラトリアムの先延ばしにならないような手だてを打つ必要があると思います。つまり、まず学校のイメージを新しく、この学校で目的をしっかり作るのだという。そして、カリキュラムとしては、総合学科的にやりますと、１年時はいろんな科目を学ぶ、あるいは「産業社会と人間」というようなものを学ぶのですけれども、２年時からのコースにおいては、非常に特色のある目的意識の明確なコースへ進んでいくのだという、非常に新しいイメージの総合学科なり総合産業高校とか、総合工業高校等を考えていく必要があろうと思います。この論点整理の資料におきましても、総合技術高校とか総合産業高校の事例が８ページ以降出ておりますように、これは単なる総合学科ではなく、やはり、技術なり産業なりの目的が明確化した総合学科的な高校を考えているという、その辺が非常に重要なところであろうと考えます。

福田会長　　ありがとうございました。非常に貴重な御意見だと思います。時間の関係もございますので、.論点１は、論点２、３、４すべてに関係してくるわけでございまして、論点１はそのまま、またご意見を賜るとしまして、論点２、３、４につきましても、どうぞご意見を闊達にお出しいただけたらと思います。まあ、論点１をもう一つ割ったのが論点２、３と考えることができるでしょうし、その解決法として、今、指摘がございました総合学科、新しい理念の総合学科の提案ということも、実は論点４に関連することだというふうに考えることができるかと思います。

どうでしょうか。他のことも一緒に議論したいと思います。ご意見をどうぞ。

清川委員　　「就職を希望する生徒に対してどのような教育が必要か」という論点ですけれど、私は、高等学校の、特に職業科の教育というのは、数学や化学・物理もあれば英語もあるでしょうけれども、ものづくりを選んだ学生さんはものづくり、それからサービス業を選んだ学生さんは、いかにこの仕事が面白いのかというようなことを教えていただくのが一番いいのではないかと思います。うちの孫は、塾通いを一生懸命やっていまして、そういう方法もいいのでしょうが、職業科を選んだ生徒さんはものづくりを教えていただくのが一番いいのではないかと思います。私は、昔学校の理科の実験で、１．５ボルトの乾電池と水と硫酸と銅板と真ちゅう板を与えられて、メッキの実験をしまして、それが忘れられなくて、今の仕事に就きました。とにかくその実験が忘れられなくて、メッキやるぞということで始めて今４５年やっています。考えてみると、その仕事に惚れるような何かきっかけが学生の時にあったということだと思います。先生のことをいうわけではないですが、今の職業系の学校で、子どもさんにそのような感動を与えられるような教育をしていただいているのかなと。実際に、いろんなことを教えていただいているのでしょうけれども、そういった授業の中、実験の中で大人になっても忘れない感動のあるような授業を盛り込むとか、まだまだものづくり大国日本といわれておりますので、そのような教育になっていくといいのではないかと思います。

福田会長　今「感動を与える教育」というキーワードを与えていただいたと思いますが、確かに、学生の頃、小・中・高・大学を含めまして、学生の頃に得た感動というのは生涯ずっと心の支えになるというのは私も同感です。しかしながら、先生は大変だと思います。学生に感動を与える講義をしなければならない、それから、進学就職に分かれる、あるいは専門と非専門の違いもあるというようなことでいくつかのマルティプルな変化に対して、かなりの力を持って対応していかなければならないということになるのですが、そういう現状でいいのか、ということだろうと思います。

これをどう解決していったらいいのかということが、この本協議会に課せられた一番大事なポイントではなかろうかと思います。そういう視点に立ち返って議論をいただきたいと思います。どの論点でもかまいませんので、どうぞご自由に御意見をお出しください。

四戸委員　今の商業科とか工業科という学科名であるとか教育システムというのは、おそらく昭和３０年代とか４０年代の産業構造に合わせたシステムではないかと思います。そして今、就職を希望する生徒、これは工業系にせよ、いわゆるサービス系にせよ、ＩＴ系の技術が一番大事だろうと思うのですが、ＩＴ系の技術は文科系も理科系もほとんど混在したような人たちが担っているような感じです。ですから、高校教育の中に、もし就職を希望する生徒でしたら、国語教育とか算数、基本的には読み書きをきちんとやることと数学的な発想、それとＩＴ技術というのが基礎にあって、それからいわゆる職業選択、これからどのような職業が出てくるか我々にも想像がつかないといった時代ですが、それに対応していくような意味では、総合学科も悪くないなと聞いていたのですが。

今までのイメージでは、工業科の人たちが、いわゆる機械を作る工場などに勤めるといったことでしたが、むしろ農業にバイオとか工業技術みたいなのが必要であったり、まさに混在化した時代なので、そういう垣根を越えたような発想が必要なのかなと思っています。それから、職業技術、職業観についてですが、先ほど福田先生がおっしゃったように、ドイツでは小学校４年生ぐらいで将来の進学コースへいくのか、マイスターコースを選ぶのかがはっきり決められるというふうに私も聞いています。それもなかなか過酷だなというような印象がありますけども、マイスターに進んだ場合に、将来の誇りを持てたり、将来いい人生が送れるというようなことであれば、そういうところへ行くのですけども、どうも大学進学した人の方が、豊かな生活を送れるというようなところがあれば、みんなそっちの方に行く。これはもう日本の社会の構造を変えていかなければいけない。そこまでここで議論する訳にはいかないですが、今、私が言いたいのは、高校の中で職業系を選ぶなら、もうちょっと幅のあるものでいいのかなと。今の時代ニーズに合わせたものをもう少し考えてほしいと思います。

福田会長　はい、どうもありがとうございました。それは非常に大切な指摘だと思うのですが、逆にちょっとご質問申し上げると、もしそのように、現代のニーズにマッチングしたような科目、学科になった場合は、職業校として就職率がもっと上がって、進学率は逆に下がってですね、この問題は解決されるかという質問に関してはいかがですか。

四戸委員　例えば、先の総裁選を争った麻生氏は、日本は漫画とか動画技術といったものをもっとやっていかないといけないと考えているとのことです。日本の国家戦略の中で、ある程度伸ばしていかないといけないような分野の教育をもっとやって欲しいし、それが進学と言う面でいうと、むしろ専門化していけば、必ず大学に

つながるような教育にもなっていくのではないかなと思うのです。今の福田先生の御指摘はなかなか難しい指摘ですが、進学率は、時代背景の中で下がることはないので、もっと上がっていくだろうなと思います。

福田会長　私も、おそらくそうだろうと思います。そうした場合にやっぱり依然として、この高校の抱えている、ダブルプロブレムと申しますか、こういう問題をどのように解決していったらいいかという問題が依然として残ってしまうわけですね。だからそれを解決するにはどうしたらいいのかと。先ほどの御意見で、抜本的に総合高校みたいな、高校連携みたいなことを考えるのだったらそれは一つの解決法になるかもしれません。

四戸委員　それも一つのアイデアだと思います。実は、私この問題を考えたときに、昔といいますか、戦後間もない時代に、地域の中核的な高校は、商業科も工業科も普通科も抱えていたことがあったと聞いています。そして、そこの工業科が分かれて、工業高校として独立したとか、商業高校として独立したとか、そういう過程もあったわけです。それは、ひとつの高校として規模が大きくなり、学生数が増え過ぎために分割することになったと思いますけれども、今度は逆に少子化で規模が縮小していくわけですから、もう一回くっつけて、以前の高校形態にするのではなくて、先ほどいわれたように新しい発想でもって、総合高校みたいなことがあって。例えば、そこで進学を希望する生徒たちが、普通科の持っている進学システムに少し入っていく。福田学長の前任者である児嶋学長は、工業科に進学されて、途中で確か普通科の方に転入されたということお聞きしています。それはまた別の事情で、大変優秀であったから、そういうお勧めがあったと聞いているわけですけども、そういうケースもあるわけですから、そういう道もあってもいいのかなと思います。

福田会長　おっしゃる通りですね。大学でも昔はそういうのがありましたね。東大を例に挙げると、理Ⅰ・理Ⅱ・理Ⅲと受けて、理Ⅰで入ってしまって、途中で理Ⅲに移ることも可能だったという時代もあったわけですから、そのような今の議論は非常にわかりやすいと思います。

昔は、総合的に全部１学科にした大きな高校でありました。それがだんだんと生徒数の増加に伴って特殊化していったというプロセスがあるのではないかと。その逆の減少が今起こっているわけだから、少子化が非常に極端に進んでいる現在、それを統合して、もうちょっと中で自由に行き来のする方向を作れば、生徒さんにとってより選択性が増すのではないかというご提案でないかと思います。

吉川委員　地域のニーズと生徒さんのニーズですね。これによって専門学科を強く堅持した学校といいますか、そういうものと、今ほどいろいろお話がでています総合学科風、新しい技術も入れた総合技術高校というような形のもの、この２種類を頭に入れて、改善を図っていくといいのではないかと思います。

福田会長　ありがとうございます。先ほどのご意見と比較的近いご意見ですね。

吉川委員　大阪では、普通科の進学校を除くと、次に来るのが総合学科なんですね。それは、１、２年は大体同じで、３年は完全に相乗りできると。例えば農業をとっていた生徒が３年時に全部商業を取れるとかですね。結局、専門との違いは、専門は専門の単位数が２５単位以上と決まっており、資格を取得しやすいのです。片方の総合技術高校、あるいは総合学科風は、資格は取得しにくいのです。その辺

のニーズを見ながら考えていく必要があると思っています。

福田会長　　ただ、学生のニーズを１００％反映しようとすると、膨大な組織を必要としますから、その辺にはある程度の縛りが必要かと思います。

吉川委員　　もちろん、これをしたいという意欲の固まった生徒さんが専門の方へ行くし、まだ少し迷いを感じている生徒さんが総合学科風のところへいくと。それをどういう組み合わせでするかというのが、福井県のあるいはその地域のこれからの研究のしどころだと思います。

福田会長　　わかりました。どうぞ

三上委員　　私の考えでは、教育というのは、原点に返ると、集団なのですね。だから今大きな問題は、人数が少なくなっていく、学級が小さくなっていく、そういう中で、子どもたちの志望をどう実現していくかということです。そして、やはり集団の中でもまれていく中で、人間が成長する。そういう中で今考えていくときに、例えば、昨年だったと思いますが、武生商業からでた女子の生徒さんだったと思いますが、すばらしい小説を書いて出したと。商業の生徒ですが、自分の将来はそういう方向で進んでいくと。結局自分の将来、自分探しの人生なのですから、どんな学科であっても、やはり１／３ぐらいの生徒は、どうしても自分で決められない。あるいは悩んでいく。これは永遠の課題だろうと私は思っています。そういう中で、ある時ふと、すばらしい先生に出会う。あるいはすばらしい施設の学校と出会う。それを探していく。そういう中でこそ、教育があるのだろうと思っています。

もう１点はですね、私の地域でＡ中学とＢ中学を統合していく。Ｂ中学の生徒は現在は１つの部活動しかできない。人数が少ないですから。そうすると、私はこういうことをやりたいとかいう希望も、ある程度の大きさになってくると可能になります。先ほどの話にも出ましたが、部活動の問題。そこに学校の力も出てくるし、生徒の力も出てくるし、先生の力もでてくる。そういうものをですね、作っていくというか、学校の力を出していくという、そういう方向で進んでもらいたいなと思っています。

今、小さな学校の生徒を一緒にするというと、保護者は大変不安に思います。うまくやっていけるか、いじめがあるのではないかとか、そんな話もありますが、新しい希望で子どもたち自身の人生が開かれる。普通科においても、１／３ぐらいは、いわゆる進学校ではないところでは、就職する生徒をかなり抱えているわけです。それをどうするか、普通科でも悩んでいると思います。

野球をやりたいけど、野球のチームは作れなかった。何か部活をやりたいけどできなかった。そういう中では、先ほど出た学科を総合させるとの考えも成り立ちます。私はものづくりも大変大事だと思っています。早く自分を発見できたもの、以前、テレビでもですね、認定試験ですか、世界に誇れるようなすばらしいものを作っていて、僕は感動しました。そういうことをできるような雰囲気というか、そういうような場面を作っていくことが大事かなと思っています。そういう意味で職業系高校がどういうような力を出せるか、これを是非考えてもらいたいなと思います。

福田会長　　どうも貴重な意見ありがとうございました。先ほどからの御意見でも、生徒さんの希望に、幸せに沿えるような有効な教育ということをやるにはどうしたらいいかということで、総合高校あるいは総合学科の新しい取組みの仕方、あるいは

相互乗入れというような考え方が出ましたけども、多くの生徒さんの中で教育することこそ、やはり大切であるというご意見ではなかったかと思います。多くの生徒の中に混じって教育を受けること、それ自体がやはり多様な人間性を受け入れて、多様さを理解できる。おそらく根本的な大命題じゃないかと思いますし、そういうものを許容する大らかな人間性と、柔軟な人間性を養うために、おそらく必須条件ではないかと思われます。したがって、あまりにも小さくしてしまったものをそのまま放置しておくということは、生徒さんにとってもこれは決して幸せな状況ではない。何とか、その中でも選択性、あるいは交流性が増していくような工夫が、福井県全体として必要なことではないかと考える次第であります。他に御意見ないでしょうか。

津田委員　たくさんのご意見をお聞きしましたが、教育の現場で卒業生と話をしていまして、この資料を見ながら疑問に思いました。ひとつは、ほとんど職業系の子どもたちが、圧倒的に、建設・製造業に就職率が多いこと。先ほどもっと細かくすべきという御意見もわかります。また、大学も無数の数があります。実際に大学に進学した子や、就職した子たちと話をしていますと、工業系高校へ行って、大学へ、例えば福井大学の工学部へ行きたいと思うと、数学と英語が非常に弱いと。２年生の後半から３年生でも間に合うのかと思っていましたが。例えば、職業系高校から福井大学の工学部へ推薦でたくさん行っているのですが、そういう子どもたちが大学で選択して数学と英語を勉強している。今は大学の先生が一生懸命が教えてくださって、４年生ぐらいには追いついていく現状らしいです。そういう子どもたちは、何のためにこの高校を選んだのか。

我々の時代は、親の姿は、農業をしているとかはっきりしていました。今は、親が一体何をしているのかわからない状態です。非常に多種・多様な職業を持っている親から生まれた子ども達は、もうひとつ多種多様なのです。そうすると、高校には、就労意識の低い子どもたちが入ってきます。当然だと思います。そうすると、具体的な選択方法を高校が教えないといけない。今、高校１年のときにすでにやっています。

情報は、１年生のときの必修であり、どの進路へ進もうが必要であります。高校では、最低の基礎・基本はやっています。そこから普通の大学へ行くのか、工業高校へ行って、やっぱり大学行きたいと思うのか、そこらあたりの選択のキレというか。今、高校自体がキレが曖昧だと思います。その時代とともに各職業系が学科名を変えたり、内容やカリキュラムを変更しています。それもずっと見てきていますが、学校現場は、いわゆる社会情勢についていけないところがあります。他の委員さんが、高校で習ったことが生かされないのではないか、とおっしゃいましたが、そうじゃなく、子どもたちは習ったことはしっかり持っていると。ただギャップが大きいから、ギャップがあるのかということも高校でもっと習いたいと。高校の先生方は一生懸命やっています。今の時代は、当たり前の基礎学力、福井は結構高いのですけど、基礎学力があって、情報が当たり前にあって、当たり前につけなければいけない力は、どの高校であろうとやるのだと。そこから、職業系は何が大事なのか。子どもたちには、いわゆる目的、目標がないのですね。何になりたいか。子どもが職業系高校を今度受けると相談に来た保護者の方が、私立高校へ出す金はないと。そうなると、その子の成績から、農業か工業かということになるのですね。この成績主義から、例えば自分は普通科いきたいけどという、そういう子どもたちが２０％くらいいますが、その子どもたちの指導に学校は大変な目にあっているのですね。点数のある子どもは自分の思ったところへ行きます。問題は、行けない子どもが、どう選択するか。何も考えないで行った子どもたち、指導を受けなかった子どもが中退としてたくさん出てくるの

です。やはり中高の連携も大事だし、地元の大学と高校の連携ももちろん大事なのですが、今、職業系の学校が、より具体的な選択ができるカリキュラムの見直しをまずしないといけない。高校の学科をみますと、情報建設であるとか、テキスタイルであるとか名前は変わっているのですが、内容的に高校は本当に見直しをかけているか、まずここからメスをいれて、総合的に持っていくというか、こうした段階を踏まないとだめかなと思います。

福田会長　どうもありがとうございました。おおむね私もそのように理解させていただいたのですが、今おっしゃったことによると、高校生のニーズが非常に多様化しているということになりますね。その多様化の原因は、社会的な複雑さにも起因するし、それから目的の不確かさということにも起因していると。いずれにせよ、かなり多様化しているから、カリキュラムも含めてですね、それに対応するようなことも考えるべきであるという御指摘だったかと思いますが、そうすると、かなり教師の負担が増すことになりますよね。

津田委員　そうですね。スペシャリストがそうたくさんはおりませんから、やはりスペシャリストを入れていく、今もやってはいるんですが、高校自身の特色というものを各職業系高校が明確に出さないと、子どもが迷うと思います。確かに教員は、今でも手一杯です。もうあっぷあっぷなんです。必死でやっているんですが、どこかがメスを、指示を出してやらないと。この協議会などで、いいアイデアを出していかないと駄目かなと思います。

福田会長　なるほど。先ほど出た具体的な話としては、例えば他の学校の普通科へ変われるようなシステム、あるいはそれと再統合するようなやり方。そこでもう一回選べると。そういうことは確かに方法的にはひとつの解決を与えることにはなりますよね。福井県は、長い海岸線を持っておりますし、当然その海の幸に恵まれた福井は、水産というのはやはりものすごく重要であり、農業立県でもあります。当然それは大事であると決まっております。だから、それを廃止するというのではなくて、それをどのようにしたら、数は減っても守っていけるのか。そして、進学といろんな専門的なものとが共存しているような、マルティプルな選択肢がある現状の中をどのようにしたら一番生徒さんが幸せに、将来の選択ができるかということをここで議論しようというのが、この会の目的であろうと思います。

津田委員　そうですね。今県立高校同士の転入を認めてきていますので、これもひとつの打開策だと思います。まだ始まったばかりですが。

福田会長　それは、実際にどの程度やられているんですか。

津田委員　始まったばかりですから、数件だろうと思います。普通科に行ったけれど、電気科に行きたいとか。逆もあります。普通科に行きたいとか。そういうふうなものを認めるのも、ひとつの改革ではないかと思います。

福田会長　先ほど出ました、普通の意味での総合学科ではなくて、将来の進む進路を全部包含したような、はっきりとした方向性を持った総合学科の設置というのもひとつの方向性かもしれませんね。他に何か御意見ないでしょうか。

吉川委員　高校ではやはり、就職するための能力をつけてやらないとだめですね。しかし、やはり社会と高校がマッチしていないところがあるということで、先ほどのよう

な、専門なら専門、あるいは総合的に、学科をまとめるというようなこともあっていいと。今のことと共通するんですが、私が前回、キャリア発達が見える学校にしてほしいということを申し上げたのはそこなんですね。中学校から高校を見た場合に、自分がその学校に行って、どういう能力をつけて、どういう方向へ就職するかというようなことが明確になるような学校ですね。それは専門高校である場合もあるし、総合学科高校である場合もあるという具合に思います。

福田会長　先ほども御意見がありましたが、今の意見も踏まえまして、キャリアアップをするような高校のカリキュラム改訂などをした場合は、やはり、より本来の目的である専門性を生かせる人間が増えてくるかどうかと。先ほどやった質問とちょっと共通していると思うんですが、そういうことは言えるでしょうか。

吉川委員　はっきりした意志や目的を持っている生徒は専門高校でいいんですが、そうではなくて、迷っている生徒であるとか、また例えば、農業と商業などは、複合することによって社会が求めることにマッチする、というようなことがあると思うんですね。そういう方向を地域、あるいは生徒のニーズによって模索していくというのがこれからの課題ではないかと思います。

福田会長　ということは、今日の論点４のですね、「新しい学科の導入が必要か」というような論点にも関わってくることだと思うんですが、場合によっては生徒さんの希望とあるいは地域の特性ということを踏まえた上で、こういう論点４にあるようなことも必要あるべしということですね。他に御意見どうぞ。

山﨑委員　簡単に申し上げます。論点４に関連しまして、資料３に新しい学科等の全国動向がまとめられております。それらを今後検討すると思いますけれども、やはり関連業界の後押しとか連携ということが非常に大事で、それができるかどうかが鍵だと思うんですね。関連業界といいますのは、ひとつは就職先等の確保ということがございます。それからぜひ強く協力をいただいて、カリキュラムの中にインターンシップ等で生徒に職業意識等をしっかりと持ってもらおうと。これは別の資料のところに、業界の方が、いろんな勤務実績以外にも、職業意識の強さを求めているというデータがございました。そうしたところにも関係してくると思います。ですから、関連業界にいかに協力してもらえるか、そこが新しい学科とつながるところであろうと。もうひとつ、論点３の進学ですけれども、やはり学校は３年間で御指導されるんですが、大学の４年間とあわせた７年間ということを職業系の学科では強く意識してやっていく必要が、普通高校以上に強くあります。７年間の専門教育でやっていくと、高大連携等を含めて考えていく必要があるだろうと思います。以上です。

福田会長　どうもありがとうございました。これも非常に重要な意見でして、先ほどの銀行の例がございましたが、やはりこれは、受ける産業側の就職上の問題があると。県としても、そういう産業界との連携をやはりしっかりと考えるべきであろうという重要な指摘だと思います。

それからインターンシップの話が出ました。当然、インターンシップには金もかかるし時間と労力もかかるわけですから、中小企業も含めた全ての企業にインターンシップを実施してくれといっても、なかなかいい返事が来ないというのが現状であるわけです。しかし逆に言うと、もしこのインターンシップができれば、生徒さんの方からみれば、福井県にはこれだけのすばらしい企業があったんだと、自分のやりたいことをやらせてくれるじゃないかと、それならとどまろうじ

ゃないかと、いうようなことを思いつかせるひとつのきっかけにもなるわけですから、インターンシップは学生のため、生徒さんだけのためじゃなくて、やはり企業のため、県のためでもあると、いうことをやっぱり意識すべきだろうと思います。その意味において、インターンシップのことも大事であると思います。今の御意見は非常に貴重な御意見ではないかなと思われます。

それから進学を大学の４年間を含めて７年間で考えるという指摘もございました。これは生徒さんがどういう大学を選ぶかということにもよるわけですが、先ほど出ました大学と高校の連携を考えると。連携先があれば、大学との間で連携を結んだ上で、高校の教育を考えていけると。職業系高校であっても、進学を無理なく行うことができると。これはまさに大学高校連携にかかっているという解釈もできるのではないかと思われます。事実、私立ですが、ある高校とある大学が、姉妹校のような形を結んで、実際に学生を送り込んでいるところがございます。そういうことを公立まで広げていくことができれば、混在の問題は、別の視点から並立することを解決できる道になろうかと思われます。なかなかいい今のご指摘だと思います。はいどうぞ。

渡辺委員　いろいろ今論議されているのですが、中学校の側から言いますと、進路指導面では、いわゆる「生き方指導」というようなものも含めて、勤労観であるとか職業観であるとかというようなことを丁寧にやってはいるわけです。しかし、最終的には入試ということで、それぞれの高校を選んで受けるということになるので、子どもの中にもいろんな思いはあっても、自分の成績を考えてどうかという現実論になれば、そこにギャップが生まれます。それから、高校と中学校との間にもいろんなギャップがあります。今、中と高とが連携しながら、進路について生徒の指導をしていただいていますけれども、子どもと中学校と高校との間にも、またギャップがございます。それから、社会のニーズと高校の学習との間にギャップがある。いろんなギャップを埋める努力をしないと、一連のものにはならないと思います。

職業系高校のことを考える場合に、私が非常に気になりましたのは、いわゆる職業人を育てるということよりも、例えば農業高校なら農業高校を窓口にして、自分の将来のいろんな職業を、世の中の職業そのものを見るというか。自分は農業には就かないかもしれないけれども、農業高校に入ったおかげで、農業を窓口にして社会のいろんな職業そのものを勉強できるというようなことが大切ではないか。職業人を養うといっても、なかなかそれは難しいことですので、どういう高校であろうと、そこをひとつの窓口にして、その高校を振り返ったときに、この高校を出たからこういうひとつの職業につけたんだというようなこと、基本的なものは高校教育で教えられるというようなことを重視していくのがひとつの基本路線ではないかと思います。

話が抽象的になるかもしれませんが、高校教育の在り方として、今何の職業に合わせないといけない、世の中がこんなものだから、こういうことができないといけないというのではなくて、そういうものも含めて、高校の中では、農業科なら農業科、工業科なら工業科を出たことが自分の一生涯の中での大きな基本線になっているということを教育していくというか。先生方自身の自分の教科に対する考え方というようなものをもう一度検討し直すというんでしょうか、自分は専門教育をするというのではなく、いわゆる生徒の人生そのものとなる職業に関わっているというような考え方で、カリキュラムそのものも考えていくべきではないかと思います。

福田会長　　ありがとうございました。今おっしゃったことは、ひとつは、先ほど出た意見とも共通していますが、中学校を卒業するときに高校を選ぶ条件というのは、必ずしも本人が納得した条件で選んでいるわけではないんだと。やむにやまれない周囲の状況の条件によって決定されている場合が多いんだということ。それから高校はやはり途中のひとつのプロセスであるから、もうちょっと自由に、場合によっては他の選択肢もありうるということにも対応していくようなカリキュラムにすべきであるというふうなことを意味されているのかなと理解しました。それでよろしいですか。

渡辺委員　　まあそうですね。

福田会長　　他に、もう大分時間が押してまいりました。どうぞ。

馬場委員　　この会議の１回目のときに、教育長の方から、学校を縮小するというか、再編の話ではないという話があったと思います。今日、ある地域で、この会議があるからというような話をしたところ、地域の人から、「学校を減らしていくという話か」というお言葉をいただきましたので、再度そのところの確認をさせていただきたいと思っています。

それと、今日、いろんな中学校のときからの教育の問題、そしてマイスター制度の課題の話、高校として職業系がどうあるべきなのか、そして社会としてどうそれを受け入れていくべきなのか、いろんな話を聞かせていただきましたけれども、やはりこれは一連の、個人の学力の質と家庭の環境と社会的な流れというのがあると思います。そういう意味では、個々の人間がどういう流れの中で、どういう人生を歩んでいくか、また、我々は最終的には仕事につかなければならない。大学を出ようが、高校を出ようが、仕事に就くんだということで、やはり、学生時代、子ども時代からの教育、そして仕事をしながらどう生活をしていくか、どう家庭を作っていくか、このことがやはり教育の現場の中でどう語られ、どう教育されていくのか、このことがひとつ大きな流れとして基本的にはとらえておかなければならないのではないかと思っています。

いくつかの課題については、思いは持っておりますけれども、時間がありませんから、今日は控えておきますが、そういうことで、ひとつお尋ねをいたします。

福田会長　　教育長の方からどうぞ。

広部教育長　　ただ今の御質問でございますが、これは知事の考え方でもあるわけですが、この高等学校教育問題協議会での御審議というのは、あくまでも統合、または場合によっては統合される学校が前提と、決してこういったことではございません。これまでこういった話が出るたびに、これまでの高問協の議論の中でも、すぐにそういった話に県民の皆様に取られてしまって、なかなか議論自体が前に進まなかったということがあります。今、各県でも一様にやっておりますのは、まずは、高等学校の生徒たち、５年後、１０年後、１５年後の生徒たちに、一番いい環境で勉強してもらいたいと。そこに視点を当てていただきたいということです。その上で、一番最初にご説明がございましたが、例えば勉強する上において、適正規模とはどれくらいの人数か、何クラスがいいかとか、そういった議論にしていただければと思います。また、今御審議いただいている職業系高校、学科の在り方も含めまして、全部有機的に絡んでまいりますので、統合ありきということではないのですが、議論の中でどういう方向へ向かわれるか、それは各委員の皆様にお任せしたいと思います。

福田会長　　私からも一言。やはりいろんな可能性を前提にしておりまして、どの可能性を排除するというものではなかろうと思います。いろんな可能性があって、その中で生徒さんが一番幸せに高校の中を過ごせて、自分の生涯に船出できるというようにするために、どのようにしたら一番効果的な教育ができるかということを議論しようということが一番の目的であり、その結果として、先ほどから意見が出ました、何かその共通したところは別個のところを選ぶとか、そういう可能性も出てくるわけです。だからこれは、例えば、廃止とか、廃校ありきというような問題ではなくて、やはり場合によっては改編というようなことも、いい方向に向かうのならば、必要としてありうべしということも頭の中には置いておくべきだろうと思うんです。だから、最初からこういう可能性はもう、悪であるというような決め方とか、あるいはこっちの方向に進むべきであるというような偏見を持った議論ではなくて、本当に生徒さんの立場に立った議論、今日は僕はいい意見がたくさん出ていると思いますので、ぜひそういう方向で県の方も参考にしていただきながら、方法を考えていただきたいと思います。他にないでしょうか。

橋詰委員　　私の方からも、教育現場の方に確認したいのですが、今日のテーマは社会のニーズに対応した職業系学科、高校の在り方ということになっています。今、改編とか統合とかいうことは別にして、現状の職業系高校というのは、今の時代のニーズにはそぐわないと、合っていないという認識を現場では持たれているのでしょうか。そこをきちんと確認しておかないと、この会議をやっても、いや現状でいいんだということであれば、別に議論しなくてもいいということにもなりますので。

広部教育長　　諮問させていただいたとおりでございまして、一番冒頭に申し上げましたとおり、これは何も福井県だけではなくて、国自体も、職業系学科、職業教育の在り方について非常に問題意識を持っております。私どもも、先ほど何人かの委員の方々がおっしゃっていたように、入学してくる生徒の動機と実際の状況、卒業進路、そのへんが非常に違っている場合が多くなってまいりました。私どもが高校に入った頃は、当時の、名前を申し上げて失礼かもしれませんが、福井農林にしても福井商業にしても、当時の今の科学技術高校でありました福井工業高校ですか、非常に活発な生徒がたくさんおりましたけれども、そうした状況ではなくなっておりまして、改革を迫られているということです。

橋詰委員　　はい。わかりました。

福田会長　　どうもありがとうございました。まだ御意見がおありかと思いますが、時間がちょっとオーバーしてしまいました。一応今日の議論は閉じさせていただいて、進行を事務局にバトンタッチしたいと思います。よろしくお願いします。

教育政策課長　　貴重な御意見ありがとうございました。本日の議事録につきましては、事務局の方で整理させていただきまして、ホームページ等で公開させていただきますので、御了承の程、よろしくお願いいたします。

今後のスケジュールでございますけれども、第３回会議につきましては、２月の中旬ということで考えています。第４回、第５回を３月中にお願いしたいと思いますので、またいろいろと日程等で確認をさせていただこうと思いますので、よろしくお願いいたします。

また、今後資料を作成する都合上、直接委員の皆様方のところへ参りまして、御意見を伺うといったような場面も生じてこようかと思いますが、その際にはよ

ろしく御協力をお願いいたします。また、次回の論点等につきましては、会長とも相談いたしまして、事前に委員の皆様にお知らせするようにしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは、第２回会議はこれで閉会とさせていただきます。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

以上